

若者の中に膨らむ孤独 ～ 孤独の先入観を取り除いた、新しい孤独層への介入の必要性 ～

社会システムコンサルティング部 副主任コンサルタント 坂田 彩衣

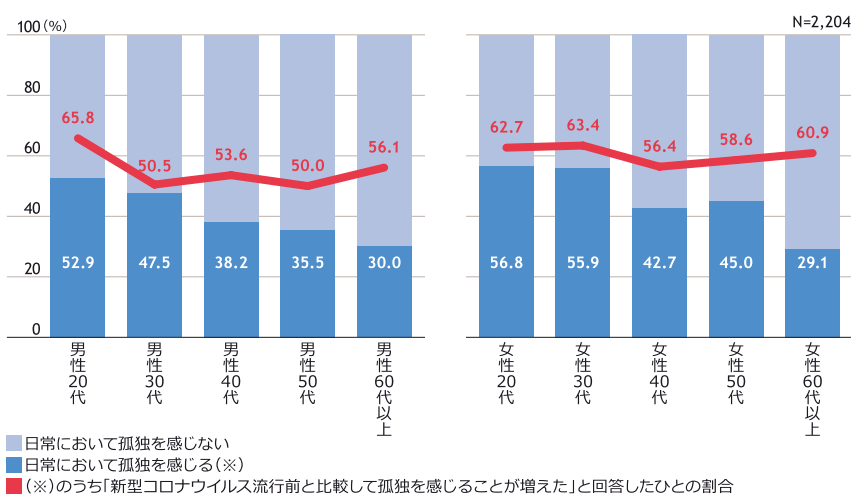
2021年2月、英国に次ぐ世界で2番目の孤独・孤立対策担当大臣がわが国に誕生した。11年ぶりに自殺者数が増加したことや、子どもの貧困、いじめ、引きこもりなどの問題の深刻化、省庁を横断した対応の必要性が大臣誕生の主な背景として挙げられている。

孤独・孤立対策担当室は今年12月以降に孤独・孤立の実態把握のための全国調査を行う予定としている。NRIではそれに先駆けて、どのような属性の人々が孤独を感じているか、コロナ禍で孤独を感じるが増えたかどうかについて調査した。その結果、図表1が示す通り、男女ともに20～30代の若年層の2人に1人が日常において孤独を感じていることが判明した。そして、その「孤独を感じる」と回答した20～30代の男女のうち5～6割以上が、「新型コロナウイルス流行前と比較して孤独を感じるが増えた」と回答している。また、一人暮らしか否か・未既婚別に孤独状況を分析したところ、一人暮らしではないひとり暮らしのひとりの方が、既婚者より未婚者の方が孤独を感じているという事実は想定内であったものの、一人暮らしではないひとりや既婚者でさえも約3人に1人が日常において孤独を感じていることがわかった。興味深いのは、コロナ禍で孤独を感じるが増えたと回答した割合が、未婚者より既婚者の方が高い点である。一人暮らしでないことや、既婚であることは、必ずしも孤独を緩和するわけではないようだ。

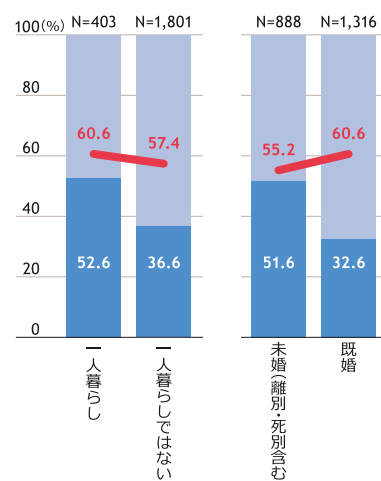
孤独は目に見えないし、その深さを測ることはできない。しかし、孤独が人々の体調や行動に変化をもたらすなど、顕在化してから対処するのは遅い。例えば、孤独が深刻化した場合、身体・精神的健康の乱れや引きこもりなどの問題を引き起こす可能性があり、それらが発生してから解決するには社会的なコストも時間もかかるからである。

独居高齢者やひとり親世帯など、これまで実施されてきた単身者等に対する支援だけでは、若者や既婚者などの本調査で明らかになった孤独を感じている層は救えない。「孤独を感じているのはこういう人」という先入観を取り除き、例えば、孤独の発生確率が高い20～30代の若年層やコロナ禍で孤独を感じるが増えた既婚者層についても対象から外すことなく、モニタリングを続けるべきではないか。今年12月以降に実施される孤独・孤立対策担当室の全国調査でも、属性(性別、年齢層等)別の孤独感の分析が予定されている。本調査から7カ月以上後に実施される調査として本調査との結果を比較するなど、「潜在的な孤独」の行方について注視し続けたい。また、NRIにおいても、若者や既婚者等のコロナ禍で孤独を感じるが増えた「新しい孤独層」の孤独の発生要因や状況について考察を深めていきたい。

図表1 男女年代別孤独の状況



図表2 一人暮らしか否か、未既婚別孤独の状況



出所) NRI「新型コロナウイルス流行に係る生活の変化と孤独に関する調査」(2021年5月)